



フィグ・ヤーパン通信

第33号

FIGU-JAPAN BERICHT, Nr.33

発行日 2008年1月1日

発行 フィグ・ヤーパン <http://jp.figu.org/>

新年のご挨拶

謹んで新春のご挨拶を申し上げます。本年も読者の皆様にとりまして、実りある一年となることをフィグ・ヤーパン一同祈念いたします。

昨年は『生命の哲学』、人間の内面について詳しく記した『心』、コンタクト記録シリーズ『プレアデス/プレヤール人とのコンタクト記録(4)』の3冊の書籍を出版することができました。また、新しい試みとして、UFO写真展を開催した他、日本最大の本の祭典である、神田のブックフェスティバルに水瓶座時代出版として出店しました。一方で、9回目となった恒例の全国読者集会を開催し、さらに読者の皆様とフィグ・ヤーパンのスタッフが対話する機会をつくるために「読者訪問日」を開設しました(奇数月の第3日曜日)。以上に加えて、FIGUスイスに2名のスタッフを派遣し、瞑想の取材を行いました。FIGUスイスの会員によるインタビューや、瞑想の実施に関する貴重な映像はDVDに収録され、今号より販売を開始しています。

そして今年も、活動の柱である翻訳出版をはじめとする様々な活動を、フィグ・ヤーパンは全力で行う所存です。また、本を通じての読者の皆様との出会いの機会の創出も大切にしたいと考えています。本年も引き続き、フィグ・ヤーパンの活動にご理解、ご協力下さいますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

平成20年 元旦
フィグ・ヤーパン一同

コンタクトシリーズ最新刊発売中です

コンタクト記録シリーズの4作目となる、『プレアデス/プレヤール人とのコンタクト記録(4)』が、水瓶座時代出版より昨年12月1日に翻訳出版されました。本書には、1953年から1964年にかけて実施されたアスケットとの会見記録をはじめ、ビリーが巨大宇宙船に乗船して旅行した31回会見の続き、32回から34回会見が収録されています。なお、アスケットは、ビリーにミッションの初歩を手解きした地球外知的生命です。若き日のビリーが、アスケットから既に数多くの重要なメッセージを受けていたことがわかります。

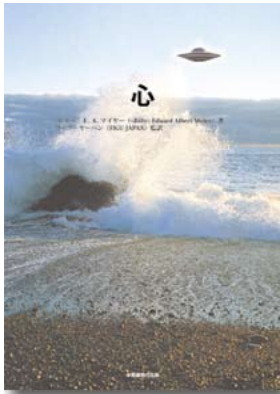
フィグ・ヤーパン通信前号では購入の申し込みを受け付けていませんでしたが、ただ今本書は発売中です。なお、次ページに紹介する新刊『心』と一緒にお求めいただくと、総額が4,000円以上で送料が無料となりお得です。この機会に是非お求め下さいますようお願いいたします。



プレアデス/プレヤール人との
コンタクト記録(4)
(水瓶座時代出版刊)

装丁: A5判 ソフトカバー
頁数: 308ページ
定価: 2000円(税込み)
重量: 430g
ただ今発売中です

新刊書『心』はただ今発売中です



心
(水瓶座時代出版刊)

装丁：A5判 ハードカバー

頁数：228 ページ

定価：2000 円（税込み）

重量：440g

ただ今発売中です

本書には、心 (Psyche)、霊、思考、感覚、記憶、想念など、人間内面の多様な要素とその働きに関する、ビリーによる解説が収められています。

目次の概要

霊と物質意識

心的傾向

心、心情、感情、感受性、感覚

記憶

霊治療

霊治療師とヒーラー

祈り治療

手ほどき

教材の区分

集中力

1. 蠟燭
2. ガラス玉
3. 水晶
4. 線

足裏マッサージー 肉体の快感

想念の力

人間は自分が考える者になる

三つの黄金律

肯定的思考

十の掟

三つの黄金律に関連した行動形態への付記

創造

心の憔悴／病気

人間の意識の大きさ

霊 (Geist) と物質意識

地球の人間は、自分が理解していないか、生半可にしか理解していない事物や事柄に間違った概念を用いるという好ましくない習慣を身に付けている。これは霊や物質的意識についても当てはまるが、ここで言う物質的意識は、実際は人間の人格も表している。間違った概念の誤用は、たとえば「精神的栄養」や「精神的財産」、さらにまた「精神病」、「精神的混乱」、「精神錯乱」、「精神障害」、「精神的未熟」、「精神的劣等」などと言った形で現れる。しかし本当はこれらの概念はいずれも霊に当てはまらない。なぜなら霊は病気になることも、混乱することも、障害を来すこともなければ、錯乱したり、その他何らかの形で損傷を被ったりすることもないからである。霊はけっして不十分であることもなければ、人間が思考したり、哲学をしたり、学んだりすることによって霊に栄養が補給されるなどと言うこともできない。また人間が文章や楽譜を書き、絵を描き、あるいは発明をしたからといって霊的財産と言うことはけっしてできない。なぜなら霊自体はそのような形で霊的財産を生み出すこともなければ、物質的意識自体で思考したり、哲学をしたり、学んだりすることによって霊が養われることもあり得ないからである。これらすべてはもっぱら物質的意識、つまり物質意識についてのみ言えることである。また、物質意識は他の何らかの事情や出来事によって病気になったり、愚かになったりすることが可能であり、また錯乱したり、混乱したり、損傷したり、あるいは不十分になったりすることもあり得る。

霊それ自体は創造の微小な一部分であり、これは物質的な領域から損傷を被ったり、否定的な形で巻き込まれたりすることはあり得ない。霊もまた物質的な領域から養われることはなく、また物質的領域内に「霊的財産」を供給する働きをすることもあり得ない。

物質的な意識領域すなわち物質意識は、その形態と力と振動において、純粋に創造の所産である不死身で不可触の霊とは対照的に、非常に損傷を受けやすい。また物質的な意識領域の方から当該する人間に帰属する財産、たとえば絵、楽譜、著作物、発明

などを生み出すことも可能である。したがってまた、すでに述べたように、物質意識は障害や病気、それどころか混乱や白痴化に襲われることがある。なぜならこの物質的意識は、実際に純然と物質的な性格にはかならないからである。

物質意識は単なる一つの意識形態そのものではない。なぜならばそれは実際に人格も具現しているからである。すべての事物、たとえば絵や発明、楽譜や書物などを作り出すことができるのもまた、この人格である。つまり人格もしくは物質意識だけが何

かを作り出すことができ、かつ病気やその他の健康障害になりやすいということは明らかであろう。誇大妄想や高慢、その他すべての否定的および肯定的な事柄もそれに基づいている。なぜならば、当該生命体を特徴づけ操作する、すべての想念と感情、すべての情動およびすべての電磁的な力と振動などが、人格もしくは物質意識によって生み出されるからである。この場合、生命体とは人間である。というのもここでは特に人間を問題にしているからである。

Q&A 質問と回答

□読者の質問

「超感覚的」という概念は本来何を意味しているのですか。それは正確にどのようなものであり、どんな働きをするのですか。(前号からの続き)

R. シュトレースラー (スイス)

□ビリーの回答

この質問に対する回答はかなり広範なものになる。というのも全体を簡単に数語で片付けることはできないからだ。あなたの関心を満たすために霊の教えから教材の一部を引用しよう。そこでは次のように説明されている。(前号からの続き)

超感覚的なもの、微細物質感覚、生気力

想念世界の生気振動は感情界の生気振動と連結しており、そのような形で想念と感情は微細物質感覚の要素として絶えず「旅行」に出ている。第3千年紀に入ってまもない今日の地球の技術では、これらの微細物質振動もしくは生気振動を装置によって、つまり粗大物質を用いて証明することはできない。しかしいつの日かこの証明に成功するであろうことは、技術の進歩と時間の問題にすぎない。そのとき、微細物質感覚は微細物質振動もしくは生気振動の形態に基づいていること、またこれらの生気エネルギーとその力はテレパシーや空中浮遊、千里眼やテレポーテーションなどの基礎をなす要素であることも認識される。事実是这样である。人間が無知のため誤って超感覚的なものと呼んでいる微細物質は、実

際に人間の脳もしくはその想念とそこから生じる感情の産物である。それは「超自然的」などではけっしてない、まったく正常なエネルギーと力であり、全体として不気味でもなければ非現実的なものでもなく、ごくなじみのあるものである。そして想念とそこから生じる感情が微細物質エネルギーとして「旅行」に出て、他の人間によって何らかの形で感受されて知覚される場合、これをテレパシーという。しかしここで明らかにしておかなければならないのは、「旅行している」のはいつも想念世界および感情界の微細物質エネルギーであり、意識ではないということである。しかもこの「旅行」は肉体の外で、「意識の触手」もしくは「意識センサー」の形でおこなわれる。その理由は、想念および感情が相応の生気振動を形成して送り出し、意識がそのためのエネルギーを提供するが、意識自身は肉体を離れることがないからである。したがってテレパシーの形で脳から放射されて「旅行」に出るのは常に想念とその感情である。そのためそれらが他の人間によって観察されたとき、鋭敏な人間はこれを「感じ取り」もしくは第7感覚によって感受できる。しかしまた彼らはこれを知覚することもできる。ある人間が窮地におちいたり、死にかけているときに、その想念と感情を鋭敏な人間に送ると、相手はこの「呼びかけ」を微細物質もしくは感受の働きによって知覚するのである。このようなことは非常に頻繁に起こる。ある人間が窮地におちいり、あるいは死の淵に立ったとき、その想念と感情が「旅行」に出て、どこか別の場所にいる、この人間にとって非常に重要な意味を持った人物に到達する。想念と感情は空間

と時間のすべての境界を突き破り、「話しかけられた」者の脳内に進入して、そこでこの「呼びかけ」が感受によって知覚される。この全体がテレパシーもしくは遠隔読心術であり、その距離は一次的な状態で900,000キロメートルにも達する。いわゆる二次テレパシーもしくは高次のテレパシー、さらには霊テレパシーになると、これよりもはるか遠くに達することができ、その距離は事実上無限である。

さらに微細物質感覚はテレパシーなどとは別のエネルギーも宿している。というのは、想念と感情により意識エネルギーを送り出すということも含まれているからであるが、これは「意識の旅行」と呼ばれる。しかしこの場合、送り出されるのは意識ではなく、想念および感情と関連した意識エネルギーの千里眼の可能性である。このような千里眼の状態において人間はその意識エネルギーから生み出されたエネルギーと力により、自分の想念と感情をコントロールして未来や過去を見ることができる。あるいはあたかも地上に浮かんで前進しながら、自分の下で繰り広げられるすべての事柄を見て認識することができる。このようなことは、たとえば病床上に横たわっていた人間が突然持ち上げられ、ベッドか手術台の上にいる自分自身の姿を見たという事例によって知られている。同様にそうした意識の浮遊状態で、他の人間やその運命を見たり、地上で起こる出来事を観察したりでき、またそのような瞬間に体験した出来事を、寸分たがわず再現することができるのである。

基本的に松果体は源泉的な要素であり、想念と感情によって微細物質感覚の領域とその中枢を形成する。人類の初期およびそれに続く時代の先祖は、この領域もしくは中枢にかなり強く干渉することができた。それどころか、微細物質感覚や想念および感情の生気振動をある程度意識的にコントロールして、意識エネルギーとその力を利用することさえできた。しかし人間の肉体と組織が絶えず変化し、想念と感情を純然と物質的なものに適応させたことにより、松果体とその微細物質的な能力は退化した。その結果、今日では程度の差はあれ鋭敏に生まれついた人間だけが、松果体の微細物質作用を利用できるのである。原初にはこの器官は直径が3センチメートルをやや上回る大きさだったが、その後収縮し

たために今日では平均してわずか3ミリメートルしかない。その理由は、人間がその内面世界をますます合理的悟性に従属させ、松果体の微細物質的な感度をないがしろにしたことによって、全体が萎縮したことにある。

松果体は、人間の感受の働きによる知覚の器官もしくは第7感覚であるが、これは多くの人間が利用できなくなった。なぜならば無意識のうちにそれに対してバリアが築かれ、その結果、松果体の別名である第3の目の機能が抑圧されて息の根を止められたからである。そのためすべての人間ではなく、ごく少数の人間だけがその機能と作用を利用できるのである。このようなバリアが形成された責任は人間自身にある。というのも、もし人間が努力したならば、たとえ松果体が退化してもこの器官をある程度は機能させることができるだろうからである。もちろんそこに至る道は長く険しい。なぜなら松果体周辺の脳の範囲と松果体そのものに十分なエネルギーを流すには、不断の瞑想の修練によって習得しなければならないからである。というのもそうすることによってしか、人間を取り囲んでいる微細物質の電磁場を意識的に知覚できないからである。しかし人間はこの生気エネルギーを知覚することなく遮断してそらしてしまうので、それに触れることすらない。しかしその結果、現実の知覚に関して相応の欠陥をきたしている。なぜなら現実には粗大物質とそのエネルギーや力や振動だけでなく、想念と感情および心の領域から生気の電磁場として生じる微細物質すなわち生気のエネルギーや力や振動も含まれているからである。これはすべての生命体で起こるものであり、本能的な衝動と感情および本能心しか生み出さない生命体でさえも見られる。人間は自分を取り巻く微細物質もしくは生気の電磁エネルギー界を遮断しそらすことによって、本当の現実をごく限られた部分しか知覚できないが、これは全人類の大部分に該当する。実際にエネルギーを遮られることなく松果体へと流し、もっぱら微細物質の領域に属する事物を見たり、聞いたりできるのはごくわずかな人間だけである。そしてまたこれらの人間は、瞑想の修練を十分に積んだならば、意識のすべてのエネルギーと力をはるかに越えて霊的なものの領域に達する超微細物質感覚的なものも感受することが可能と

なる。しかしこれについて言うておかなければならないのは、意識の進化をまだ十分に遂げていないという限りで地球人には超微細物質感覚は不可能であり、これからも長い間そうだとすることである。それにもかかわらず理性と悟性の豊かなすべての地球人が相応に瞑想の努力をするならば、自分のなかに微細物質感覚を目覚めさせ、発達させて利用できるようになるのである。

微細物質感覚に関する事実は、目の見える人間だけでなく、盲人も（目の見えない一切の動物同様）昼と夜のリズムに組み入れられており、肉体のすべての機能、さらには瞳孔もこれに適応している。ここから、盲人が一とりわけ盲人が一微細物質感覚的なものを知覚し、感受の点でも特に活発であるということが帰結する。もちろん彼らは粗大物質感覚的なものも知覚するが、その感受能力は目の見える人間よりもすぐれている。それは彼らのエネルギーが「内面の目」もしくは松果体に向けられているからである。そのうえ盲人の場合は、特殊な神経細胞が網膜を貫いていて、それらが松果体に信号を送り、それによって「内部時計」を制御して肉体の生命リズムを規定するメラトニンというホルモンの産生が刺激される。

人間の脳は松果体のほかにも注目すべき重要な要素を持っている。たとえば「早期警戒システム」が前頭葉の近く、「前帯状皮質」(anterior cingulate cortex)、略してACCと呼ばれる脳領域にある。この脳領域は、たとえば困難な決断を下すとき、特に互いに相反する選択肢の間で決断しなければならないときに活発になる。ACCは、感受によってのみ知覚でき、したがって直接的な警告要素として意識に入ってこない危険が差し迫ったり、発生したりしたときに人間に警告を発する。もう1つの要素は、感受の働きによる音の知覚に関するものである。これらの音は大型動物や地震などから発する超低周

波音で、粗大物質感覚の作用としては現れず、また人間の粗大物質感覚によっても知覚されえない。このような低周波音は、少なからず不可解な「妖怪現象」の原因でもある。これはたとえば風が穴や岩の亀裂、煙突や隙間などを通るときに笛のような音を出す、そのとき極端に低い音を発生する。それは人間の耳には知覚できないが、その振動は人間の体に、そしてもちろん松果体にも作用して、ある特定の形態の微細物質感覚による作用を引き起こす。それが感受によって知覚されるのである。

人格を刻印した放散は、オーラと呼ばれる放射要素であり、これは他の人間が十分に鋭敏であるか、松果体のエネルギーと力、したがって感受を意識的に利用できるならば、感受することができる。事実、すべての人間は、人格情報を含んだ微細物質感覚もしくは生気の電磁場に囲まれており、そのため人格の刻印もしくは放射は情報場とも呼ばれる（ここに述べるすべてのことは、秘教的なたわごととも、不埒にも虚栄心や営利欲から霊媒を自称する詐欺行為とも無縁である）。この生気の電磁場は同胞にも作用し、十分鋭敏な同胞によって知覚され把握されることができる。つまりこのような人間の人格の生気場が同胞に到達して、同胞を感化できるのである。しかしまたこのような感化は、想念と感情を他の人間（または動物）に集中させることによっても起こる。なぜなら集中によって想念と感情が微細物質振動を起して生気場が強化され、その結果として「標的にされた」同胞が「メッセージ」を受け取り、把握するからである。事実、人間の人格と全肉体ははっきりなしに微細物質の電磁的振動もしくは信号を送り出している。これらは他の人間に知覚されるが、残念なことにそれは無意識のうちにおこなわれるにすぎない。なぜなら人間はその内的世界を単なる合理的悟性に向けた結果、松果体の萎縮を招いたからである。 (次号に続く)

— UFO 地球外からやってきた宇宙船 —

地球外生命体は恐れるべきか

地球外生命体は本来恐れるべきではない。彼らは我々地球人と同じ性質を持っているとは言え、はる

かに平和的である。このことはあらゆる点で進化と関連している。攻撃に関して彼らは攻撃性のある程度克服して、事実上防御のみに自己制限している。

防御はたいい生命に危険のある麻痺兵器を用いて行われるが、稀に意識の力を用いることもある。麻痺兵器を使うのは自分が脅かされていると感じる場合に限られ、悪意から使うことはない。しかしそのような事態に至るのを回避するために、ほとんどの地球外生命体は、どこかの惑星を訪れて調査する際には姿を見られないようにしている。それゆえ全般的に見て、彼らを恐れる必要はまったくないのである。

が、これについて例外は存在しないなどと主張するつもりはない。なぜなら普通の平和的な地球外生命体のほかに、非人間的な形態や発達の遅れた人種も存在するからである。彼らは宇宙を略奪して回り、ときどき地球にも来る。彼らは人間を拉致したり、その他いろいろ悪事をしたりする。しかし彼らはそれほど大規模に地球にやって来るわけではないので、大きな危険にはならないだろう。

地球に向けて絶えず否定的なエネルギーを放っている者も、それほど危険な存在ではない。なぜなら彼らにあっては昔から肯定的なもの、そして平衡したものが優勢だからである。

宇宙には征服や戦争に明け暮れる生命体も存在するが、さしあたり大きな危険はない。いつかは宇宙から攻撃してくることは予想されるが。

宇宙のどこかの世界に怪物のような生命体が生きているか、私には正確な判断を下せない。なぜなら私自身はそのようなものを一度も見たことがないし、また地球外生命体は私に、そのような怪物は地球人の純粋な空想の産物であることを保証しているからである。

この報告は信頼してもよいだろう。というのも、まさに宇宙飛行の能力があり、宇宙やきわめてさまざまな世界を旅行している知的生命体よりも確かな判断を下せる者が誰かいるだろうか。

我々の太陽系の可住性

我々の太陽系で、何らかの種類の人間的な生命体を担うことができる唯一の惑星、それは地球である。それ以外のすべての惑星は不毛であるか、すでに荒涼としているか、あるいは人間の生命が住むには発達あまりに遅れている。ただし、月や金星や火星などに特別に建設した基地で小規模に住んでいるケ

ースは除く。しかし実際的人类は地球の上だけに住んでいる。何らかの種類の霊的生命体も、我々の太陽系の別の惑星に存在するということはない。

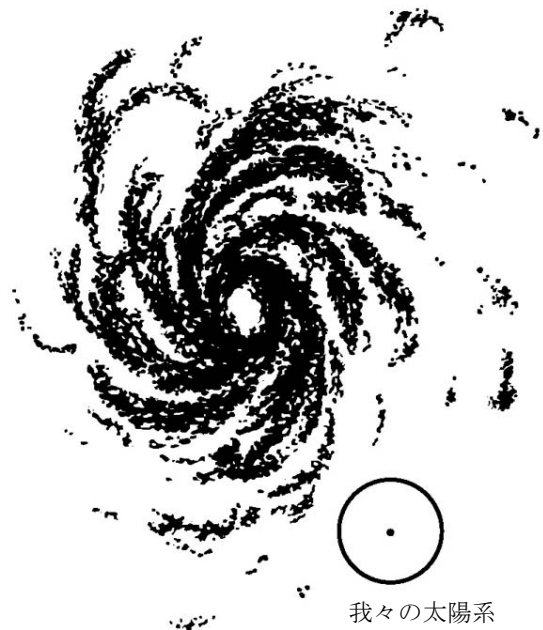
我々の太陽系の位置

地球外生命体が地球に「大量」に訪れず、ごく少数しかやってこないのは、我々の太陽系が消滅の過程にあり、また事実上銀河系の飛び地をなしているからである。我々は銀河系の1本の渦状腕から切り離された系として、地球外生命体の通常のすべての飛行経路の外に存在している。銀河系から見るとゾル太陽系は、いわば「一匹狼系」または「失われた系」をなしている。

地球の人間が最も近い恒星を訪ねようとする、4.5光年の距離を移動しなければならない。なぜなら地球に最も近い恒星であるアルファ・ケンタウリ系はそれだけ離れているからである。

4.5光年は約42兆7000億キロメートルに相当する。この距離を移動するのに光は秒速約30万キロメートルの速度で4.5地球年かかる。つまり地球に最も近い恒星に到達するためには、地球から光速で4.5年必要である。

銀河系の図解。右下の円のなかに太陽系を遠く離れた飛び地として示した。



(出典：UF0s Raumschiffe von fremden Welten)

フィグ・ヤーパンからのお知らせ

□ 全国読者集会在開催されました □

2007年11月23日、第9回全国読者集会在、東京の日本青年館で開催されました。北海道から岡山まで、52名の読者の皆様にご参加いただきました。今年は、女性の方も多く参加されていました。

当日は新刊書『心』、『プレアデス／プレヤール人とのコンタクト記録(4)』が先行発売されました。また、フィグ・ヤーパンからの活動報告、出版案内、FIGUスイス訪問報告、時事的なトピック記事の紹介が行われました。読者集会在終了後は、半数以上の方が懇親会に参加され、終始和やかな雰囲気で行事を終えることができました。

□ ブックフェスティバルに出店しました □

水瓶座時代出版／フィグ・ヤーパンは、2007年10月27日、28日の2日間、東京の神田古本屋街で開催されたブックフェスティバルに初出店しました。27日は生憎の雨のため中止となりましたが、28日は天候に恵まれ、出店することができました。当日は、東京近辺の読者の方にいらしていただき、暖かい励ましをいただきました。お手伝いくださったボランティアスタッフの皆様にも、お礼申し上げます。

□ 今年出る本 □

フィグ・ヤーパンでは、2008年に2冊から3冊の書籍を出版する予定です。

『アラハト・アテルザータ』 ビリーが1975年にARAHAT ATHERSATAと呼ばれる形体が無く非物質的で純粋な高次の霊形態からのインパルスを受け取り記された著作です。「アラハト・アテルザータ」とはサンスクリット語で「時を観照する優れた者」という意味だそうです。「時を観照する優れた者」として物事の起源と結末において認識した真理を、私たち人間に理解できる言葉で開示したものが本書です。現在2名の翻訳者による翻訳を終了し、2回目の内部校正を実施中です。出版は今年7月頃を予定しています。

『プレアデス／プレヤール人とのコンタクト記録(5)』 おなじみのコンタクト記録シリーズ第5巻

となる本書は、翻訳が完了して校正作業が進められています。出版は11月頃を目標にしています。

『地球外知的生命プレアデスとのコンタクトー宇宙の深遠より』 水瓶座時代出版からの今年度中の出版に向けて、準備が進められています。

この他、小冊子類、時事的な記事の翻訳についてもできるだけ進めたい所存です。今年もフィグ・ヤーパンの活動の柱となる翻訳出版活動にどうぞご期待ください。

□ FIGUスイス訪問ビデオの発売 □

昨年5月フィグ・ヤーパンのメンバーがFIGUスイスを訪問し、センターや施設の案内、瞑想に関するインタビューを取材したビデオを発売します。今回の取材目的は、瞑想に関するインタビューを実施することにあります。ビデオには、平和瞑想の発音や姿勢、ピラミッドの活用法、ペントラ、オーム瞑想などについて、スイスの会員による解説が収録されています。また、取材時に実際に行われた平和瞑想の様子も収められています。スイスFIGUによる許諾を得てフィグ・ヤーパンが編集し、特に瞑想を実践されようとしている読者の皆様を対象に販売することになりました。



収録時間 約82分 DVD形式
価格 3,000円(税込 送料別85グラム)

出版物のご案内

■ プレアデス／プレヤール人とのコンタクト記録(1)

価格 2,000 円 (税込 送料別 375 グラム)

■ プレアデス／プレヤール人とのコンタクト記録(2)

価格 2,000 円 (税込 送料別 440 グラム)

■ プレアデス／プレヤール人とのコンタクト記録(3)

価格 2,000 円 (税込 送料別 335 グラム)

■ プレアデス／プレヤール人とのコンタクト記録(4)

新刊! 価格 2,000 円 (税込 送料別 430 グラム)

■ **心** 新刊!

価格 2,000 円 (税込 送料別 440 グラム)

■ 瞑想入門

価格 3,200 円 (税込 送料別 815 グラム)

■ わずかばかりの知識と知覚そして知恵(新風舎刊)

価格 3,150 円 (税込 送料別 870 グラム)

■ 生命の哲学

価格 1,000 円 (税込 送料別 150 グラム)

■ 日本語版 水瓶座時代の声

価格 各 1,000 円 (税込)

83/1 号 (特集) (送料別 140 グラム)

83/2 号 (特集) (送料別 105 グラム)

87/1 号 (特集) (送料別 140 グラム)

91/1 号 (特集) (送料別 135 グラム)

■ 第 235 回会見

価格 500 円 (税込 送料別 70 グラム)

■ 霊と肉体における生

価格 500 円 (税込 送料別 70 グラム)

■ ビリーの少年時代の著作

価格 500 円 (税込 送料別 95 グラム)

■ 預言者エレミヤとエリヤの予告

価格 400 円 (税込 送料別 70 グラム)

■ エノクの預言

価格 300 円 (税込 送料別 55 グラム)

■ 『瞑想入門』の手引き

価格 300 円 (税込 送料別 70 グラム)

■ 地球に平和あれ

価格 300 円 (税込 送料別 55 グラム)

■ FIGUの原則あるいは人間の原則

価格 300 円 (税込 送料別 40 グラム)

■ パートナーシップ (男女間の協力関係)

価格 200 円 (税込 送料別 40 グラム)

※このページに掲載した以外にも多数の書籍があります。ホームページ等をご覧いただくか、フィグ・ヤーパンまでお問い合わせください。

□ 書籍のご注文について □

すべての書籍・ビデオ類のご注文は、郵便振替にて承っております。ご希望の書籍・ビデオ代金に以下の郵便料金を加えた金額を、お近くの郵便局から下記フィグ・ヤーパンの口座宛にお振込みください。なお、現金書留および切手同封による直接のお申し込みはご遠慮ください。

□ 郵便料金表 □

50 グラムまで 120 円 500 グラムまで 290 円
100 グラムまで 140 円 1000 グラムまで 340 円
150 グラムまで 180 円 2000 グラムまで 450 円
250 グラムまで 210 円 3000 グラムまで 590 円

※4,000 円以上お買い上げの場合、郵送料は無料です。

□ 振込用紙の記入欄 □

口座番号：00160-4-655758

加入者名：FIGU-JAPAN

(アルファベットで記入して下さい)

金額：送料を含めた合計金額

払込人：あなたの住所、氏名、電話番号

通信欄：購入する書籍名と冊数

フィグ・ヤーパン通信 第 33 号 (無料)

発行日 2008 年 1 月 1 日

発行 フィグ・ヤーパン (FIGU-JAPAN)

住所 〒192-0916

東京都八王子市みなみ野 3-11-2-305

電話 042(635)3741

FAX 042(637)1524

URL <http://jp.figu.org/>

E-mail info@jp.figu.org

郵便振替 00160-4-655758

加入者名 FIGU-JAPAN

本書の全部または一部を無断で複製複製することは、著作権法上の例外を除き禁じられています。本書からの複製を希望される場合は、フィグ・ヤーパンにご連絡ください。

Copyright (c) 2008 by FIGU-JAPAN. All rights reserved.